

一八八三年四月十五日(日)

祭りの日、スレンドラ邸におけるタクール、聖ラーマクリシユナ

大聖アンナプルナ祭に際して信者たちと共に、スレンドラ邸におけるタクール

スレンドラ家の中庭に聖ラーマクリシユナが案内されて腰を下ろされたのは、夕方六時ころであった。

中庭から東方に礼拝堂が建っている。お堂のなかには美しい大実母神像が祀られてある。大実母の御足元にはハイビスカスとビルヴァの花が、また首には花の輪飾りが掛けられていた。礼拝堂を照らして大実母は坐っていらつしやる。

今日は大聖アンナプルナ(食物を与える神としての大実母の呼び名)祭である。チヨイトロ白分八日目。一八八三年四月十五日、日曜日(ベンガル暦一二九〇年ボイシヤク月三日)。スレンドラは大実母の供養をするので、タクールをご招待した。タクールは信者たちを連れてお着きになり、すぐに礼拝堂に上がつて聖なる神様を拜まれてから、像に向き合つてじつと見つめながら、指をお使いになつて根本^{マシヨ}真言をくり返していらつしやる。やはり神像に礼拝をすませた信者たちが、師の傍に立っている。

やがてタクールは、信者たちと中庭に出られた。中庭にはカーペットが広げてあり、その上にシートが敷かれ数個の枕がおいてある。一方の隅に、横太鼓とカルタルカルタル（小さなシンバル）を持った数人のヴィシユヌ派信徒が坐っている。讃神の歌舞をするのだろう。タクールを囲むようにして一同も坐った。誰かが、タクール、聖ラーマクリシユナに枕によりかかると申上げたが、タクールは枕の傍にはお坐りにならなかつた。枕を押しやってこうおっしゃつた。

聖ラーマクリシユナ（信者たちに向かつて）枕によりかかつて坐る！ どういうことかわかるだろう。ウヌボレ、自尊心のたぐいを捨てるのは、とてもむずかしいことだよ。そんなもの何でもない、すぐ捨てられると考えているかも知れんが、どうして、どうして――。あれはどこからともなくやってくるんだ。

山羊の首を切り落としても、手足や体はビクビク動いているだろう。

恐ろしい夢を見たあと、はつきり目覚めてシャンと起き上がってからでも、まだ胸はドキドキしている。ウヌボレはまさにこんな具合のものだ。追い払っても、追い払っても、どこからかやってくるんだよ！　そしてすぐふくれっ面つらをして、この私を何だと思つてる。などと言うんだ」

ケダル「ワラの如き謙虚、樹の如き忍耐」

聖ラーマクリシユナ「わたしは、信仰者にくつついてるチリのそのまたチリだ」

ヴァイディヤナートは高い教育を受けた人物である。カルカッタの高等裁判所の弁護士をしている彼は、手を合わせてタクールに拝礼してから片側に席をとつた。

スレンドラは聖ラーマクリシユナに向かって申し上げる。

「この人は、私の親戚でございます」

聖ラーマクリシユナ「そうかい、善い人のようだね」

スレンドラ「この人は、あなた様に何かお訊ねしたいことがありますそうで、ここに参りました」
聖ラーマクリシユナ、ヴァイディヤナートに向かって――

「目に見えるすべてのものは皆、あの御方の力だ。あの御方の力がなかったら、誰も何もすることはできない。だが、こういうことは言える――つまり、あの御方の力はどの場所にも同じだけ現れているのではない。ヴァイディヤサーガルが、『神は或る人には、他の人より大きな力をお与えになるのですか?』と言ったから、わたしはこう答えたよ。『授かっている力に大小がないものなら、どうして、わたしがあんなのところ^にに会いに来るんだね? あんたに角が二本生えてでもいるのかい?』と。神様はあまねく一切のものに在す。ただ、力の顕れ方^{あらわ}はそれぞれにちがう、ということだ」

〔自由意思は神の意志か?〕

ヴァイディヤナート「せんせい! 私には疑問が一つあるのです。このフリー・ウィル、つまり、自由意志というもの――しようと思えば善いこともできるし、悪いこともできる――これは真実ですか? ほんとうに我々は自由にできるのですか?」

聖ラーマクリシユナ「すべては神の思召^{おぼしめ}し。あの御方の遊戯^{リウ}。あの御方はいろいろなものをお創りに

なる——小さいの、大きいの。強い、弱い。善い、悪いの。善人、悪人。これは皆、あの御方のマヤー（現象＝幻象だ。ゲームなんだ。見なさい！ 庭にありつただけの木、どれひとつ同じものはない。神をつかまぬ間は、自分は自由で独立している」と思っている。この間違つた思いを持たせて下さるのは、あの御方なのだ。そうでない、罪はもつと増えただらう——罪に対する恐れがないだらうから。罪の報い（罰）もなかつたらうから——。

神をつかんだお方の気持ちが変わるかね？ 私は道具、あんたが使い手。私は部屋であんたが住み手。私は馬車であんたが御者。行かせる通りに私は行く。言わせる通りに私は言う」

〔訳註——神をつかむまでは、あの御方は、自分が行つた悪事には罰が与えられるという因果応報の思いを持たせてくれる〕

〔見神は一日で成るか？ サードウとの交流が必要〕

聖ラーマクリシュナ（ヴァイディヤナートに向かつて）議論をするのはよくない。あなた様はどう思うの？」（訳註——タクルの話し方は丁寧な言葉と子どものような言葉が混ざつた変なしゃべり方の時があつた）
ヴァイディヤナート「おっしゃる通りです。まことの智慧を獲た後では、議論したい気持ちはなくなりませす」

聖ラーマクリシュナ（英語で）サンキュー（一同大笑）。あんたはそうなるよ！ 誰かが神について話をして人も人は信用しない。だれか偉大な魂のお方が、私は神を見た」とおっしゃつても、一般の人々は受けつけない。心のなかで、もし神様を見たのなら我々にも見せてみる。そうしたら信用

してやる。など思っているのだ。だが、一日で脈が見れるようになれるかね？ 長い間、医者にくつついて廻らなかりやならないのだ。そうしてやると、これはカバ(粘液)の脈、これはヴァーユ(風)の脈、これはピッタ(胆汁)の脈という具合に見分けられるようになる。脈を見るのを商売している人たちと、いつも一緒にいなかりやならんのだよ(一同笑う)。(訳註——インド伝統医学アーユルヴェーダでは、人間の体質を、カバ(胆汁)、ヴァーユ/ヴァータ(風)、ピッタ(粘液)の三つの体質トリ・ドシヤに分類している)

誰にでも糸の番手が見分けられるかね？ 糸の商売をするんだ。糸の商いをしている連中の店に長年住み込んでいれば、これは四十番手、これは四十一番手の糸と一目で言えるようになるよ」

信者と共に楽しい讃神歌——三昧境

こんどは讃神歌キールタンが始まるところだ。太鼓が鳴っている。伴奏団が鳴らしているのだ。まだ歌は始まらない。太鼓の甘くなつかしい調べを聞いている人々は、ガウランガの輪昔、聖チャイタニヤを中心に踊りながら出来た信者たちの輪」と、その人たちの称名讃歌のことを思い出していた。タクールは三昧境に入りかかっていらつしやる。時々、ご自分の頭の方に視線を上げてこうおつしやる。「ああ、すばらしい！ ああ、すごい！ 髪の毛が逆立つ——」

歌い手たちは、「どんな歌をうたいましょうか？」とお訊ねした。タクール、聖ラーマクリシユナはていねいに答えられた。「ガウランガ(チャイタニヤ)のことを、すこし歌っておくれ」

讃神歌キールタンが始まった。まず最初に序曲ガウルチャンドリカ。その後につづいて種々の讃歌を——

ガウランガの愛の強さに

わざわざの退くさまは

百万の黄金こがねの弓も

はるかに及ばざりき

ガウランガの顔えの笑えまいは

世にあまねく照りかがやき

千万の秋の月も

恥ずかしげに戸惑うばかり なすこともなし

讚神歌はガウランガの様子を描写している。歌い手が即興の句をはさむ。たとえば――

(友よ！ 私は満月を見た)

(欠けることなく、汚れなく)

(胸の中まで明るく照らす)

歌手はまた、こんな句をはさむ――

(千万の月の 不滅の甘露で 顔をみがき)

この言葉を聞きながら、タクールは三昧状態になられた。

歌は先へと進んだ。しばらくすると、タクール、聖ラーマクリシュナの三昧は解けた。霊的な気分
に圧倒されて突然立ち上がり、愛に狂う牛飼いの女のように、聖クリシュナの美しさをたたえる
歌い手といっしょになって即興の句をお入れになる――

(友よ！ 美しい姿が悪いのか 惹かれる心が悪いのか?)

(わたしの三界のシャーマ(クリシュナ)だけ ほかに見るもの何もない!)

タクールは踊りながら即興句を口ずさまれた。信者たちは感じ入って拝見している。歌い手は、こ
んどは牛飼いの女たちの言葉をうたった――笛よ、静かにおし！ おまえはどうして眠らないの?
そして即興句をいれた――

(どうして眠っていられよか!)

(寢床は、やわらかい若葉で!)

(尊いお唇の甘露を食べて)

(お指でなでていただいで！)

タクールは再びお坐りになった。讚神歌はつづく。聖シユリ・マデー女・ラーダーの言葉をうたっている——「目
は見え、耳は聞こえず、匂いもかげず、この身の感覚かんじはすべて去り——。なのに、私はただひとり、
どうしてここに残された」

さいごは、クリシュナ・ラーダーの結び合いの歌になった。

さまざまの野花をつなぎ

浅黒き首にかざりて

いまここに憩やすみい給うは

徳高き玉たまの美丈夫びじょうふ

美丈夫びじょうふ——美貌の若者

〔いよいよ結合の歌になる〕

クリシュナといとしきラーダーは

ニドウの森にて一つになりぬ

1883年4月15日(日)

二人の美しさ 世にたぐいなく
その愛もまた たぐいなし

半身は黄金こがねのようにまばゆく

また半身は青玉サファイヤのかがやき

半身は首に野の花輪をかけ

また半身は大粒の真珠を

半身は耳にマカラの耳輪を

また半身はきらめく玉を

半身の額は明月のように

また半身は太陽ひのように

半身の頭には優雅な孔雀の羽

また半身はゆたかに髪を編み

金の睡蓮のかざりキラキラと

まさに玉を吐く蛇のように

マカラ——神話に出てくる海の動物

讃神歌は止んだ。タクールは、パーガヴァタ(聖典)、バクタ(信者)、バガヴァン(神)という真言をお口で称えながら、何度も何度も地面に頭をつけておじぎをしていらつしやる。あたりにいる信者たちと、讃神歌によって浄められた大地に対して、御あいさつをなさっているのである。

タクール、聖ラーマクリシュナと有形の神と無形の神

夜もおよそ九時半ころになった。大聖アンナブルナの礼拝室には明かりがついている。正面にタクール、聖ラーマクリシュナは信者たちと共に立っておられる。スレンドラ、ラカール、ケタル、校長、ラーム、マノモハンはじめ、まだ他の大ぜいの信者たちがいた。彼らは皆、タクールにお相伴しよばんして食事をとつたのである。スレンドラは、皆がすっかり満足するようなご馳走をしてもてなした。もう、タクール、聖ラーマクリシュナは南神村トッペンケーシヨルのお住居に戻られる時間である。信者たちも各々の家に帰ることだろう。皆そろって礼拝堂に入った。

スレンドラが聖ラーマクリシュナに向かって申し上げる。

「今日はその、大実母マの御名おん(歌)が一度も出ませんでした」

聖ラーマクリシュナは神像を眺めながら――

「ああ、お堂がきれいだなあ。大実母マが光りかがやいて坐っていらつしやる。こんなにして見ていると、心こゝろから喜びが湧いてくるよ。いろんな欲や悲しみなんか、みーんな吹き飛んでしまう。だけど、無形の神は見られないか――そんなことはない。しかし、俗っぽい気持ちがあるの少しでも残っていたら

だめなんだよ。むかしの見神者たちは、何もかも一切投げ捨てて全きサツチダーナンダを瞑想なすつたものだ。

今日このごろの梵智行者たち(ブラフマ協會の人たちは、不動の、不断の、と言つて歌をうたうが——わたしにや味気ないね。歌つてる人たちだつて、喜びを感じているようには、ちつとも見えない。粗末な糖蜜の飲み物だけで満足していると、氷砂糖でつくった飲み物を探す気もなくなる。

お前たちだつてそうだろう。こうしてお像を見てみると、どんなにか和やかない気分だろう。無形の神だ、無相の真理だと言つて廻つても、それこそ何一つ得るところはないさ。そんな連中は、外にも内にも、何にも獲られないよ——

そしてタクールは、大実母の名を称えてから、歌をおうたいになる——

よろこびに満ちあふる大実母よ

つたなき我を悲しませることなかれ

御身の二つの御足のほか

わが心は何一つ知らず

日に月に　かくばかりの苦惱を

誰に嘆かんすべも知らず

生まれこし上は とにかく
世の海こゆるは我がのぞみ

はてなき海に投げ入れしは
君なりと われ夢にも知らず
夜も昼もドウルガーの名にすがらで泳げど
苦しみ悲しみの種はつきず
われ今死なば 君の名も消ゆべし

また、おうたいになる――

となえよ となえよ ドウルガーの御名を
いざいざ となえよ わがこころよ

ドウルガー ドウルガー と呼びつつ行けば
シヴァの大神 槍もて守護す

シヴァの大神――原文はシュウラパーニ、三
又の鉾ほこを手にした者という意味

君は昼 君は夕暮れ 君は夜
あるときは男に あるときは女に

去れ去れと言えど我は去らず
君の御足の鈴輪となりて鳴る

君は鳶のごとく大空たかく舞い
われは魚となり水音たてて泳ぐ

わが世の命尽きてみもとに行けば
紅むらさきの裳すそに憩わせたまえ

タクール、聖ラーマクリシユナは、もう一度お像に向かつておじぎをなさった。そして、階段を下りられるとき、「おう、ラカール、靴、あるか？（ラー、ジュ、アー？）」と聞かれた。（訳註——ラー、ジュ、アーの本来のベンガル語はラカール、ジュト、アチエッだが、靴が盗られてないかラカールだけに分かる言葉で聞かれた）
タクールは馬車にお乗りになった。スレンドラがおじぎをした。他の信者たちも頭を下げた。月はまだ道を明るく照らしていた。タクールの馬車は南神村に向けて出発した。